

最近、若者の間で「クリぼっち」という言葉が使われているそうです。「クリスマス」に「一人ぼっち」でいることの淋しさを言い表しています。世のクリスマスモードの非日常的な華やかさやお祭り騒ぎが、一人でいることを否定的に、孤独に映し出してしまふのかもしれませんが。ですが、一人でいることが本当に淋しいのではなく、誰も信頼できる存在がない、そのことが本当の淋しさや孤独を生みだしているように思います。いくらクリスマスに大勢で騒いでいたとしても、そこに信頼関係がなければ、孤独なままなのです。

本日の箇所は、ヨセフが婚約者であるマリアの妊娠を知る場面から始まります。ところがその妊娠に、ヨセフは身に覚えがありません。他の男性との関係を疑わざるを得ない状況です。そして、当時のユダヤ律法に従えば、マリアは、婚約中に姦淫の罪を犯した疑いで死刑となってしまいます。マリアへの愛と疑いの狭間で思い悩むヨセフの苦しみや葛藤、孤独は、どれほどのものであったのでしょうか。悩みの末、彼が出した結論は「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切る」（19節）ことでした。そうすれば、婚約を破棄した後の妊娠ということで、マリアの死刑を免れると考えたのでしょう。

さて、そんな不信と孤独の夜を過ごすヨセフのもとに、天使がきて、「妻マリアを迎え入れなさい。そのお腹の子は、聖霊によって宿った」（20～21節）と語りかけます。神は、ヨセフが最も誰かを信じられない時に、敢えて“私を信じて”妻と子を迎え入れなさいと迫ったのです。なぜなら、誰も信頼できないような孤独を満たすことができるのは、それでもなお信頼できる者の存在がいることだからでしょう。そして、何よりヨセフを励ましたであろうことは、神ご自身が、ヨセフを信頼しているということです。疑いと迷い、不信に満ちたヨセフに、大切なひとり子イエス・キリストの命を委ねようとするのですから、相当な信頼がなければ出来ません。

何もかも全く信じられない立場に立たされる夜。そんな時、すべての存在と縁を切り、これが現実なのだとして孤独のなかに生きるしかないのでしょうか。悩みと不信のどん底に、空しさの中の空しさに、しかし神は、再び信頼を求めてきます。「それでも私を信じなさい。信頼を回復しなさい。恐れることはない。私はあなたと共にいる」と。

（文責：望月達朗牧師）

